

# 対話を通じた学生の気づきを促す支援を目指して

## —雄飛館ラーニングcommons 学習支援カウンターの役割—

京都産業大学 学長室（グローバル化推進室） 千葉 美保子



### はじめに

近年、国内のさまざまな高等教育機関において、学生の能動的な学びの手法であるアクティブラーニングへの転換と、それを促す学習支援への取り組みが実施されている。

京都産業大学（以下、本学）では、「会話を通じて率直に話し合う中で、お互いの差異を擦り合わせ、何か新しいものを共に創っていくこと」として「相手の価値観（異文化・異文脈）を受け入れ、一人の人間として尊重し合う活動のこと」を「対話」と呼び、この「対話」を通じた教職員・学生に対する教育施策を進めている。本稿では、雄飛館ラーニングcommons内学習支援カウンターに常駐する専門職員である学習支援員が実施する、対話を通じた学びの支援について報告する。

### 学習空間「雄飛館ラーニングcommons」

本学では、二〇一二年度（平成二十四年度）に採択された文部科学省「グローバル人材育成推進事業（現：経済社会の発展を牽引する

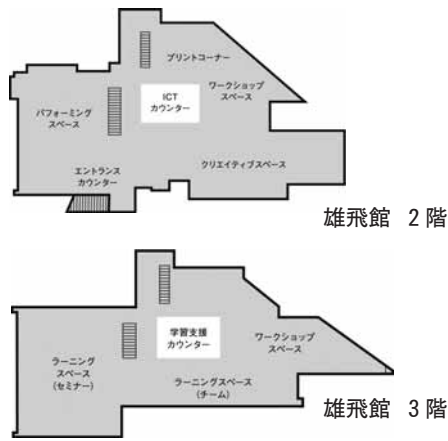


図1 雄飛館ラーニングcommonsのフロア構成

やアクティブラーニング型授業・イベントを行う学習環境の提供および運営支援を試行している（図1）。

通常時は学生の正課外での学習空間として開放し、公開講座や授業、セミナー等でもスタッフに事前相談を行うことで利用を可能としている（千葉ほか、2015a）。

グローバル人材育成支援の一環として、二〇一四年四月に雄飛館ラーニングcommonsを開設し、

「共に学び、共に創る『共創空間』」をキーワードに、学生の自主学習

### 専門職員による学習支援

ラーニングcommons内学習支援カウンターは学生の正課外学習の支援を目的とし、雄飛館の開設と同時に三階事務室内に設置された。当カウンターでは①日本語／英語ライティング・プレゼンテーションの個別相談対応、②日本語／英語学習関連のワークショップの実施、③ICT（情報通信技術）機器の利用相談を通じた学生のジェネリックスキルの習得の支援を、常駐する学習支援員が行っている。学習支援員は任期付の専門職員であり、現在スタッフとして日本語／英語ライティング・プレゼンテーション支援員が各一名常駐し、各種支援にあたっている。いずれも文学、言語学で修士以上の学位を持ち、教育機関での教員・チューター歴を有している。またICT専門の支援員を一名配置し、学生の情報リテラシー能力の支援にあたっている。このように、幅広い専門性を有した職員を配置することで、学生の多様なニーズに対応できる学習支援環境を維持している。職員が学習支



図2 個別相談の様子

援員として常駐することで、学生スタッフが対応するのよりも専門的に、教員が対応するよりもフラットな関係性をもって支援にあたるのが可能になっている。

個別相談対応では、平日九時から一六時三〇分までをコアタイムとし、一セッション三〇分間で対応にあたっている。利用者は事前に専用の申込みフォームから予約が可能であり、相談内容に応じたスペースをラーニングcommons内から選ぶことができる。飛び込み対応も試験的に受け入れており、対象は本学に在学する全学生である。

個別相談では、宋入れなどの添削指導やProofreading（スペル・文法チェック）は行わず、学生が持参した資料やデータをPCモニターで見ながら、学生との「対話」を重ねることで、学生がアイデアを整理し、自ら疑問点やその解決策を探求し、考えを表現し、発信する力を養うよう支援している（図2）。任意で回答を依頼している利用者アンケートでの満足度は五段階評価中四・八（有効回答九四件）と、個別相談に対する満足度は極めて高い。

また、大学での学びに必要な知識・スキルの習得の支援を目的に、二〇一四年春学期よりライティング・プレゼンテーション等スタディスキルに関するワークショップをラーニングcommons内外で実施し、二〇一五年度からは授業科目との連携の試行を進めている。

### 対話による学生の気づき

二〇一四年度にラーニングcommonsにて実施した本学学部学生へのヒアリング調査では、学年・学部を問わず文章力やプレゼンテーション力等の「自己を表現する力」に漠然とした不安や苦手意識を感じていることが明らかになった。その背景には、レポート試験等における教員から学生へのフィードバックの不足がある。「提出しても点数が分からない。どこがよくてどこが悪いのかわからない。直しようがない」「出したら出したで終わり」という発言が象徴的である（千葉・松井、2015b）。そのため、「フィードバックの不足感」をどのようにフォローしていくのが、学習支援員の課題となっている。

対話型の支援は点数化ができないゆえに、目に見えた効果が表れにくい。しかし、学生の意識の変化は目を見張るものがある。学習支援利用者への事後ヒアリング調査では、「考えていた事を質問されて答えると自分の考えがより明確になった」「（相談してからは）二・三回見直しをするようになり、文章表現などを気にするようになった」という声があがっている。一歩ずつではあるが、支援を通じて、着実に学生自身が「自ら考え・気づく」ことを意識するようになってきている。

### 今後の展開に向けて

本学におけるライティング・プレゼンテーションに特化した学習支援制度は開始したばかりであり、管理・運営に専任の教職員が携わっていない。また、学習支援員の業務は学習支援に留まらず、ラーニングcommonsの管

理・運営やラーニングcommonsの活性化・維持を主な業務とするラーニングcommons学生スタッフ（LCS）の管理・育成など多岐に渡っている。ジェネリックスキルの支援が学部・科目単位で広がりがつつありながらも、学生の自主学習を支援する新たな人材の育成・活用が難しい状況下において、他部署との連携が急務である。

本学の教育施策の特徴として、教職協働の修学支援に加え、教学センターに所属するピアサポーターや、ファシリテーションを展開するF工房所属の学生ファシリテーターなど、学生による学習支援が充実している点があげられる（大谷ら、2014）。これら学内の支援部署は、イベントの共催などを通じて連携関係を構築する取組が進められているが、恒常的な連携を強化していく必要がある。

ラーニングcommons学習支援カウンターは、学習支援の仲介拠点として、点在していた支援を結びつける体制を整えることを目指している。

### 【参考文献】

- 大谷麻子、中西勝彦、松尾智晶（2014）「初年次キャリア形成支援教育科目『自己発見と大学生活』キャリア科目担当学生ファシリテーター活動について」高等教育フォーラム（4）、pp.71-80.
- 千葉美保子、松井きょう子、中沢正江（2015a）「多様な学習スペースを活用した学習支援・教育支援の試み—雄飛館ラーニングcommonsにおける新たな学びへの支援—」高等教育フォーラム（5）、教育支援研究開発センター、pp.47-56.
- 千葉美保子、松井きょう子（2015b）「学生の主体的な学びを支援する仕組みづくりに向けて—学生へのヒアリング調査から—」第二一回大学教育研究フォーラム発表論文集、pp.274-275.
- 京都産業大学教育支援研究開発センターICER A DES（https://www.kyoto-su.ac.jp/outline/approach/excellence/、二〇一五年八月六日閲覧）